

目 次

推薦のことば (佐々木正利) …………… 1

序 文 …………… 4

教会カンタータ Geistliche Kantaten …………… 7

世俗カンタータ Weltliche Kantaten …………… 393

モテット Motetten …………… 469

ミサ／マニフィカート Messe/Magnificat …………… 483

受難曲／オラトリオ Passionen/Oratorien …………… 489

付 録

教会暦と福音書章句 …………… 554

宗教曲用語集 …………… 557

索 引

教会カンタータ索引 …………… 564

世俗カンタータ索引 …………… 569

推薦のことば

佐々木正利

キリスト教が他の宗教と違って音楽を重用しているのは周知のことですが、それは何故なのでしょう。そのヒントは神像、カリスマ的な人間の像、超常的な自然構造物などの偶像を崇拝するか否かにあります。我が国のいたるところでは、山や大木、滝などの自然を信仰し、神棚に手を合わせ、仏様を拜む光景が見られます。しかし、キリスト教では、創られた神、いわゆる偶像に対する崇拝を禁止しています。何故なら、キリスト教においては、神は唯一絶対の存在であり宇宙の創造者であって、人間や自然が創った物ではないからです。私たちがそのような神を創るなら、神はとたんに低次元で卑俗な存在となってしまうのです。尤も、ユダヤ教や実はイスラム教も、『旧約聖書』の出エジプト記 20：4、いわゆるモーセの十戒の第2「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない」に従い、偶像崇拝を禁じていますし、仏教においてでさえ、釈迦は「私の姿を拜んでどうしようというのか」と偶像崇拝を否定し、その入滅後 200～500 年は仏像は存在しなかったのですけれども。

それはともかくとして、キリスト教においては、神と人とを結ぶのはことばであり、そのことばをより実効ならしむるために音楽が用いられます。ですから、パレストリーナも、バッハもモーツァルトもベートーベンもシューベルトもブルックナーも、まるで神様が宿ったように素晴らしい音楽を作り、私たちにその賜物を与えて下さったのです。彼らの音楽によって、私たちは癒され、浮き浮きし、熱くなり、励まされ、心慰められます。そう、音楽は目に見えない神様からの最大の贈り物なのです。

私は、中学生の頃から音楽を好んで聴くようになりました。特に好きだったのがショパンとチャイコフスキーでしたが、高校に入ってから合唱に取り組み、パレストリーナ気違いとなって、ついにはパレストリーナを芸大で歌いたい、と入学してしまいました。パレストリーナのどこが好きだったか。それは、あの柔和で透明なハーモニー、幸福感に満たされた心安らぐ響きが故でしたが、学生運動の波にもまれる若者にとっては、心和むいのちの水となりました。しかし、音楽の心地よさに酔いしれてはいたものの、歌詞の内容にはまったく興味が湧かず、精々「鹿が泉の水を慕うように私の魂も主を慕います」程度の歌詞に心を動かす不届き者でした。

さて、まもなく私は自分の失敗に気づくことになります。というのも、芸大にはパレストリーナを歌おうなんていう奇特な人間はいなかったのです。そこで仕方なく始めたのがバッハです。何故ならば、バッハなら声楽科の連中もソロに繋がるから興味を示してくれるだろうし、また器楽の連中ともいっしょに活動ができるからです。しかし、始めてみてすぐ新たな問題に直面しました。ドイツ語ができないし、わからないのです。さすがに私も、芸大生になってからは歌詞の意味もわからないで歌うということはしなくなっただけなのですが、普通の歌だったなら日本版の楽譜やレコードが出ているから対訳がついていますし、また音源によって全体像もつかめます。しかし、当時はバッハのカンタータなんて国内盤はほとんどなく、また楽譜も図書館から旧バッハ全集を借り出して青写真をとって歌う有り様でしたから、畢竟自分で調べる以外にありません。この作業が困難を極めました。

結局、語学力とともにキリスト教の知識も薄く、恩師小林道夫先生の助力を得ながら悩み悩み訳していきましたが、こうした苦勞が一言ひとことに思いを込めさせ、歌う言葉にいのちが宿っていったような気がします。尤も、懸命に訳して心を込めて歌った歌が、後年になって国内盤が出て、そこに載った有識者による対訳を見たなら、私の訳はまったくのお門違いだった、なんていう笑えないエピソードもあります。

そんな時です。1972年からテレフンケンレーベルより刊行され始めたバッハのカンタータ全集は、私たちにとって神様からの素敵な贈り物となりました。何しろ、小さくはありましたが新バッハ全集によるスコア（総譜）と、バッハ研究の第一人者、東大の杉山好先生による格調高い全訳がついていたのですから。先生の訳は、文語調で少々難しくもありましたが、次々に出される新カンタータは先生の訳を得て我が物となっていきました。

文語調の訳といえば、当時小林先生は東京バッハ合唱団の指揮者を務められていて、度々その演奏を聴きにいったものです。この合唱団、主宰者の大村恵美子先生による日本語訳でカンタータを演奏する特徴をもっていました。正直、聴いていて歌詞は聴き取れるものではありませんでした。しかし、後にわかったことですが、大村先生が日本語訳にこだわったのは、聴き手にことばをわからせることよりも、歌っている側がことばをリアルタイムにわかって歌うためとのこと。まさに正鵠を射たり、ですね。

さて、あれから30数年が過ぎました。私も、バッハ歌い、バッハ指揮者として一端の評価を戴けるようになりましたが、その間、バッハの声楽曲の全訳、しかも文脈を的確に把握した、わかりやすい口語調の訳は出ないかと待ち続けておりました。それがこの度、何といわば身内の若林敦盛君によって成し遂げられたのですから、驚きとともに大いなる喜びとなりました。若林君は東北大学でドイツ語の研鑽を積み、在学当時から私の指導する東北大学混声合唱団と仙台宗教音楽合唱団に在籍し、演奏する楽曲の対訳を作ってくれていました。その訳は実にわかりやすく、時にキリスト教的慣用表現とは異なることもありましたが、しかし、それだけに宗派を越えた万人の視点で出来事を見つめ、自然な自分たちのことばで語りかけてくるのです。和訳する場合、文脈を損なわずに短くまとめるには、それこそ文語調の方が口語調に優るのは自明のこと。しかし、彼の訳はその難点を見事に克服し、語るにリズムも抑揚もよく、まるでオリジナルが日本語であるかの錯覚すら覚えさせます。

私は、合唱団や声楽のレッスン生らに、詩をよく読み、理解して歌いましょう、と諭します。何故ならば、作曲家も必ずそうして作曲しているはずだからです。歌詞の意味や内容を理解することはもとより、歌詞を何遍も朗読してふさわしい抑揚やニュアンスが出てきた時、初めて曲の趣きが生かされるのではないのでしょうか。この朗読に際して、私は原詩だけでなく和訳も、しかも声を上げて読むように勧めています。というのは、日本語の方が感情移入しやすいと思われるからです。この点に即しても、若林君の訳は心に染み入るように自然なイメージを作り上げてくれるのです。

彼は、最近、日本語字幕の分野にも積極的に関わり始めました。字幕は簡潔さがモットーであるために、逐語訳にこだわらず意識を取り入れていく必要がありますが、それにしても原意は忠実に反映されるべきものです。その点でも、ペーター・シュライアーの『マタイ受難曲』の演奏会での仕事は見事なものでした。このように、彼は意欲溢れる勉強家ですから、今回の対訳集に不具合が見つかりましたなら積極的に

指摘してあげて戴きたいと思います。ことばは常に生きており、変化するものですから、より良い表現があれば彼は積極的に取り入れるはずで。

若林君が、仙台宗教音楽合唱団とともに成長し、我が国のバッハファンに貢献できることを我がことのように嬉しく思い、これからも彼との共同作業を活発に展開していきたいと、団員一同の気持ちと合わせて、切に願っています。

(仙台宗教音楽合唱団常任指揮者／声楽家／岩手大学教授)

序 文

普段レコードやCD、演奏会でさまざまな対訳を目にすることがあると思いますが、それをどのように読まれているのでしょうか？『歌詞対訳』というのは言うまでもなく「歌われる歌詞の意味を理解するためのもの」です。ただ音楽は時間と共に流れていくものですから、「その時々歌われている言葉の意味を即時的に理解する」ことの助けとなることが望ましいと思います。ですから、この対訳では簡潔な直訳を基本とし、原語の表現に忠実に、そしてなるべく原語一つ一つの単語の意味を取りやすいように努めました。その結果、純粋な日本語からすると文章や語順が前後している所が多々ありますが、原語と見比べ、考えながら読むことで、原語とそれに作曲された音楽の理解の助けになると確信しています。よって、この対訳は聞き手以上に、自分の声と楽器でバッハを演奏する人々の助けとなれるでしょう。

確かにバッハの時代の宗教詩にはいま読むと古めかしい表現も見られますが、多くは現在話されているドイツ語にもある「生きた言葉」です。ルターの宗教改革によってドイツの人々が耳にする事ができるようになった「自分たちの言葉につけられた音楽による礼拝」、それに共感するためにもこの対訳の中では文語表現を控え、分かりやすい自然な言い回しを使うことにしました。

もちろんドイツ語の詩の美しさを損なわないように努めましたが、正直力の及ばない所も多々ありました。翻訳と同様に対訳にも多くのジレンマが存在します。ドイツ語と日本語というまったく言語構造の違う詩を並べて対応させるというのは、なかなか悩ましい仕事と言えます。レツィタティーフのような音楽的に単純でありながら言葉の多い詩は、必然的に訳す人の主観が入らざるを得ません。「甘え」と取られるかもしれませんが、読み手側も訳す側の意図を汲みながら、ただ日本語の文章を丸呑みにするのではなく、どうか原語の意味、表現を理解しようとしながら読んでもらいたいのです。

当時の聴衆と現代の日本人のキリスト教に対する知識の差は比べるまでもなく、直訳だけでは理解に苦しむ箇所も多々あると思います。しかしあえて訳註は控え、いくつかの用語については巻末に解説を付けました。バッハの宗教曲を理解する上でキリスト教の基本知識は必要不可欠なものです。『旧約聖書』のユダヤ人の歴史の大まかな流れ、そして『新約聖書』のイエスの生涯などは斜め読み程度でも読んでおくべきです。その上でカンタータの演奏される教会暦に対応する『福音書』や『書簡』の章句を一読すれば、さまざまな比喩を理解するヒントが得られるでしょう。一句、一行レベルでの聖書の引用はあえて示しませんでした。パーモント大学の高名な Philip Ambrose 氏のウェブサイトには歌詞の英訳と共にすべての引用、注釈が加えられているため、詳しく知りたい方はそちらを参照されることをお勧めします。インターネット時代になって情報を集めるのは圧倒的に便利になりました。この対訳の原文についてもほとんどが専門のサイトに頼っています。もちろん一通りのチェックはしましたが、さまざまな版がある曲などは違う歌詞を採用しているものもあるかもしれないので注意していただきたいと思います。

この本の対訳の前にも先人の多くの労作があり、また今後も多くの人々が取り組んでゆくでしょうが、その誰もが自分なりの主義主張をもって仕事に当たっているでしょうし、僕自身もそれらに最大限の敬意を払っています。さまざまな主観による多くの解釈が提供される事が、対訳を必要とする人たちのためになると考えています。特にバッハの分野での偉大な先人、杉山好先生、磯山雅先生の仕事にはここで深く尊敬の念を示したいと思います。杉山先生の格調ある文語体の訳には、確かに「あまりにもわかりにくい」

と非難もありますが、接続詞、副詞を漏らさず一語一語に意味をとってゆく丁寧な仕事振りは間違いなくこの分野での理想の一つと言えます。

かつて磯山先生が書いていましたが、この分野において「出版する」ということは即ちスペースとの戦いに他なりません。自由詩においては一行一行の字数制限があり、当然1ページ毎の行数制限もあります。この本ではわがままを言わせてもらい、カンタータ毎にページを新たにしたために余白が多く生まれ、ページ数もかさんでしまっています。それでも逆にいくつか中途半端な部分での改ページがあるなど、正直理想には程遠いと言わざるを得ませんが、高価な本になってしまった事に対しては申し訳ない限りです。また『全集』と銘打ちながらこの本に収められていないコラール集やシメツリ歌曲集などは『補遺版』として後日出版する予定ですのでお待ち頂きたいと思います。

対訳を出版するまでにさまざまな方にお世話になりました。まず、最初に声をかけてくれた慧文社の村上さん。校正作業でも多くの助言を頂きました。そして何よりも僕自身が在籍している仙台宗教音楽合唱団の Familie の皆さん。バッハとの出会いの場でもあり、ここにはとても書き尽くせないほど多くのものを頂いています。この本は謹んで皆さんに献呈させていただきます。そしてその Familie の一人でもある、岩手大学の佐々木正利先生。初めて演奏会プログラムに載せた対訳を先生に誉めて頂いた時の事はいまでも忘れられません。バッハの、そして宗教音楽のスペシャリストである佐々木先生に本来なら多くの助言を頂いてこの本を完成させたかったのですが、ご多忙のために叶わなかったのが残念です。そして「優しい訳」と言ってくれた佐々木まり子先生。初めてカンタータを訳した BWV169 の時から、アルトのソロにはまり子先生のイメージが反映されることになりました。お眼鏡にどうかどうかかわかりませんが、どうか心広く読んでいただきたいと思います。

最後に、一番最初に「僕の対訳のファン」と言ってくれ、たびたび忠告や助言をくれた一人の友人に、心からの感謝と友情を込めて。

2006年12月 若林 敦盛

主な参考サイト、書籍

The Bach Cantatas

<http://www.cs.ualberta.ca/~wfb/bach.html>

Bach Cantatas Website

<http://www.bach-cantatas.com/>

Texts of the Complete Vocal Works with English Translation and Commentary

<http://www.uvm.edu/~classics/faculty/bach/>

Bibel-Online.NET

<http://www.bibel-online.net/>

『バッハ事典』（東京書籍）

『新聖書大辞典』（キリスト新聞社）

BWV 244 Matthäus-Passion

第一楽章

Erster Teil

- Chor

Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen,
Sehet — Wen? — den Bräutigam,
Seht ihn — Wie? — als wie ein Lamm!
O Lamm Gottes, ungeschuldig
Am Stamm des Kreuzes geschlachtet,
Sehet — Was? — seht die Geduld,
Allzeit erfunden geduldig,
Wiewohl du warest verachtet.
Sehet — Wohin? — auf unsre Schuld.
All’ Sünd’ hast du getragen,
Sonst müßten wir verzagen.
Sehet ihn aus Lieb und Huld
Holz zum Kreuze selber tragen!
Erbarm dich unser, o Jesu!

＜Rat Jesum zu töten＞

- Bibeltext

Da Jesus diese Rede vollendet hatte,
sprach er zu seine jüngern:
(Jesus),„Ihr wisset, daß nach zweien Tagen Ostern wird,
und des Menschen Sohn wird überantwortet werden,
daß er gekreuziget werde.“

- Choral

Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen,
Daß man ein solch scharf Urteil hat gesprochen?
Was ist die Schuld, in was für Missetaten
Bist du geraten?

- Bibeltext

Da versammelten sich die Hohenpriester
und Schriftgelehrten und die Ältesten im Volk
in dem Palast des Hohenpriesters, der da hieß Kaiphas,
und hielten Rat,
wie sie Jesum mit Listen griffen und töteten.
Sie sprachen aber:
(Chor),„Ja nicht auf das Fest,
auf daß nicht ein Aufruhr werde im Volk.“

マタイ受難曲

Picander 作
『マタイによる福音書』第26～27章

第一部

- 合唱

来なさい、娘たちよ、私の嘆きに力を貸しなさい、
見なさい — 誰を? — 花婿を、
彼を見なさい — どのような? — 子羊のような姿を!
おお 神の子羊よ、罪無くして、
十字の幹において屠られた方よ、
見なさい — 何を? — その忍耐を見るのです、
常に耐え忍んだ方よ、
どれほどあなたは嘲られたことでしょう。
見なさい — どこを? — 私たちの罪を。
あなたはすべての罪を背負ってくれました。
そうでなかったら私たちは弱気になっていたでしょう。
愛と恩寵ゆえに
十字の木柱を背負う彼を見なさい!
私たちを憐れんでください、どうかイエスよ!

[Nikolaus. Decius 作のコラール<O Lamm Gottes unschuldig>第1節]

＜イエスを殺す計画＞

- 聖句

イエスはこれらの言葉を語り終ると、
自分の弟子たちに言った。
(イエス)「知ってのとおり、2日後に過越すきこしの祭りになる、
そこで人の子は引き渡され、
十字架につけられるだろう」

- コラール

心から愛するイエスよ、あなたは一体どんな罪を犯して
そのような厳しい裁きを下されたのですか?
罪は何なのですか? どのような悪事に
あなたは陥おちいってしまったのでしょうか?

[Johann Heermann 作のコラール<Herzliebster Jesu>第1節]

- 聖句

その時、祭司長と
律法学者、そして部族の長老たちは
カイファという大祭司の神殿に集まり、
話し合いをもって
どうやってイエスを策略によって捕え、殺そうか決めていた。
そこで彼らは言った。
(合唱)「やはり祭りの間はいけない、
民衆の中で騒ぎが起きないようにしよう」

<Wasser gegossen>

- Da nun Jesus war zu Bethanien,
im Hause Simonis des Aussätzigen,
trat zu ihm ein Weib,
die hatte ein Glas mit köstlichem Wasser
und goß es auf sein Haupt,
da er zu Tische saß.

- Da das seine Jünger sahen,
wurden sie unwillig und sprachen:
(Chor),„Wozu dienet dieser Unrat?
Diese Wasser hätte mögen teuer verkauft
und den Armen gegeben werden.“

- Da das Jesus merkete, sprach er zu ihnen:
(Jesus),„Was bekümmert ihr das Weib?
Sie hat ein gut Werk an mir getan.
Ihr habet allezeit Arme bei euch,
mich aber habt ihr nicht allezeit.
Daß sie dies Wasser hat auf meinen Leib gegossen,
hat sie getan, daß man mich begraben wird.
Wahrlich ich sage euch:
Wo diese Evangelium geprediget wird in der ganzen Welt,
da wird man auch sagen zu ihrem Gedächtnis, was sie getan hat.“

- Rezitativ (Alt)

Du lieber Heiland du,
Wenn deine Jünger töricht streiten,
Daß dieses fromme Weib
Mit Salben deinen Leib
Zum Grabe will bereiten,
So lasse mir inzwischen zu,
Von meiner Augen Tränenflüssen
Ein Wasser auf dein Haupt zu gießen!

- Arie (Alt)

Buß und Reu
Knirscht das Sündenherz entzwei,
Daß die Tropfen meiner Zähren
Angenehme Spezerei,
Treuer Jesu, dir gebären.

<Judas, Verrat unternehmen>

- Bibeltext

Da ging hin der Zwölfen einer
mit Namen Judas Ischarioth
zu den Hohenpriestern und sprach:

《香油を注がれる》

- さて、イエスがベタニアにいた時、
らい病人のシモンの家で
一人の女性がイエスに歩み寄り、
持っていた瓶の中の高価な香油を
イエスの頭に注いだ。
イエスが食事の席についていた時だった。

- するとイエスの弟子たちがそれを見て
腹を立てて言った。
(合唱)「何のためにそんな無駄遣いをするんだ?
この香油を高く売ったら
貧しい人に施しができたのに」

- イエスはそれに気づくと、弟子たちに言った。
(イエス)「なぜこの女性を困らせるのか?
彼女は私に良いことをしてくれたのだ。
おまえたちの周りにはいつも貧しい人たちがいるが、
私は ずっとおまえたちというわけではない。
彼女がこの香油を私の体に注いだのは、
私が葬られる備えのためにしたことなのだ。
よく おまえたちに言うておく、
世界中の福音が伝えられるところで、
彼女のしたことは 記念として語られるだろう」

- レツィタティーフ (アルト)

愛する救い主よ、
あなたの弟子たちは愚かにも責めました、
この敬虔な女性が
香油であなたの体に
墓へ葬る準備をしたことを。
どうか私に許してください、
私の眼から流れる涙の
一滴をあなたの頭に注ぐことを!

- アリア (アルト)

ユダと後悔で
罪深い心は二つにきしみます。
そうして私の涙の滴は
かぐわ香しい香油として
誠実なイエスよ、あなたのために流されるのです。

《ユダ、裏切りを企てる》

- 聖句

その時、十二人の一人で
イスカリオテのユダという名前の者が
祭司長たちのところへ行行って 言った。

付録 教会暦と福音書章句

教会暦／BWV	書簡章句／福音書章句
待降節第1日曜日 BWV 61, 62, 36	ローマ 13:11-14 (救いは近づいている) マタイ 21:1-9 (エルサレム入城)
待降節第4日曜日 BWV 132	フィリピ 4:4-7 (主において常に喜べ) ヨハネ 1:19-28 (洗礼者ヨハネの証)
降誕祭第1日 BWV 63, 91, 110, 248 I, 191	テトス 2:11-14 (すべての人に救いをもたらす神の恵み) / イザヤ 9:2-7 (メシア預言) ルカ 2:1-14 (降誕、羊飼いへのお告げと天使の賛歌)
降誕祭第2日 BWV 40, 121, 248 II	テトス 3:4-7 (神の慈しみと愛であるキリスト) ルカ 2:15-20 (羊飼いが飼い葉桶のイエスを探し当てる)
ステファノの記念日 BWV 57	使徒 6:8-15&7:55-60 (ステファノの説教と殉教) マタイ 23:34-39 (イエスの使者を殺すファリサイ人)
降誕祭第3日 BWV 64, 133, 151, 248 III	ヘブライ 1:1-14 (御子は天使に勝る) / シラ 15:1-8 (知恵の働き) ヨハネ 1:1-14 (永遠の言葉である神)
降誕祭後第1日曜日 BWV 152, 122, 28	ガラテヤ 4:1-7 (キリストは律法のもとに生まれた者として遣わされた) ルカ 2:33-40 (シメオンとアンナによるイエスの将来の預言)
新年(元日) BWV 190, 41, 16, 171, 248 IV	ガラテヤ 3:23-29 (私たちは信仰によってキリストに結ばれている) ルカ 2:21 (割礼と命名)
新年後第1日曜日 BWV 153, 58, 248 V	1ペトロ 4:12-19 (キリストの名のために非難されるのなら幸いだ) マタイ 2:13-23 (エジプトへの避難とヘロデの幼児虐殺)
公現の祝日 BWV 65, 123, 248 VI	イザヤ 60:1-6 (栄光と救いの到来) マタイ 2:1-12 (東方の博士たちのベツレヘム来訪)
公現の祝日後第1日曜日 BWV 154, 124, 32	ローマ 12:1-6 (キリストにおける新しい生活) ルカ 2:41-52 (神殿での少年イエス)
公現の祝日後第2日曜日 BWV 155, 3	ローマ 12:6-16 (キリスト者として求められる愛と義務) ヨハネ 2:1-11 (カナでの婚礼)
公現の祝日後第3日曜日 BWV 73, 111, 72, 156	ローマ 12:17-21 (善によって悪に打ち勝て) マタイ 8:1-13 (癒しの奇跡)
公現の祝日後第4日曜日 BWV 81, 14	ローマ 13:8-10 (隣人愛) マタイ 8:23-32 (嵐を静める)
マリア清めの祝日 BWV 83, 125, 82, 158, 200	マラキ 3:1-4 (主は突然、その聖所に来る) ルカ 2:22-32 (シメオンの賛歌)
復活祭前第9日曜日 BWV 144, 92, 84	1コリント 9:24-10:5 (人生は競技場で走るのと同じ) マタイ 20:1-16 (ぶどう園の労働者のたとえ話)
復活祭前第8日曜日 BWV 18, 181, 126	2コリント 11:19-12:9 (パウロの弁明) ルカ 8:4-15 (種をまく人のたとえ話)
復活祭前第7日曜日 BWV 126, 22, 23, 127	1コリント 13:1-13 (愛の賛美) ルカ 18:31-43 (受難の予告と盲人への癒し)
復活祭前第3日曜日 BWV 54	エフェソ 5:1-9 (清い生活の勧め) ルカ 11:14-28 (悪霊を追い出す)
棕櫚の日曜日 BWV 182	フィリピ 2:5-11 (キリストの人間性) / 1コリント 11:23-32 マタイ 21:1-9 (エルサレム入城)

付録 宗教曲用語集

A

Abel (アベル)

(人名) アダムとイブの第2子。カインの弟。

カインが農耕に従事して「地の産物」を捧げたのに対し、アベルは牧畜に従事し「群れの初子と肥えたもの」を捧げた。「主がアベルとその供え物を顧みた」ために、カインによって殺された(『創世記』4章)。

新約では信仰の厚い義人として述べられている。

BWV57-2

Abner (アブネル)

(人名) サウル軍の司令官だったが、いさかいによってダヴィデ軍に寝返ろうとした。

しかし以前の戦いでダヴィデ軍の長ヨアブの弟アサエルを心ならずも殺してしまったために、ヨアブの復讐を受けて死んだ。(『サムエル記下』3)

BWV52-2

→ Joab

Adama (アドマ)

(地名) ソドム近くの街。

『創世記』においてケドルラオメルの連合軍とソドム、ゴモラなどと共に戦い敗れた。(『創世記』14)

BWV89-1

→ Zeboim

Ärgern, sich 憤る

(動詞) ヘブライ語、ギリシア語の「つまづく」に対するルターの訳語。

神は悪を行う人、信仰の弱い人に対してイエスの十字架と死や迫害、誤った教えなどの「つまづき(さまたげ)の石」を置く。ドイツ語本来は「不快な気持ちになる」、「気分を害する」の意味。

BWV186, 244

B

Babels Ofen (バベルの炉)

預言者ダニエルの同輩の仲間3人が、バビロンのネブカドネツアル王の立てた金の像を拝まなかったために燃え盛る炉の中に投げ込まれたが、傷一つ無く無事に出てきて王は彼らの神を賛美した。(『ダニエル記』3章)

BWV130-4

Balsam (バルサム)

芳香と鎮痛効果のある香油。「苦痛を和らげるもの」の意味

BWV103-3

Belial (ベリアル)

(悪魔) ヘブライ語で「価値のない者」を意味し、旧約で「邪な者」と訳される(『ヨブ記』34:18、『ナホム書』2:1)。

新約では定冠詞をもち「サタン」の呼称として使われた。

ユダ王国のマナセを偶像崇拜へと誘い、ソドムとゴモラに同性愛、獣姦を広めた悪魔と考えられている。

BWV24-4, 76-4, 181-1

Bräutigam, der (花婿)

(名詞) 花婿

新約では神の国は結婚式にたとえられ、救い主は花婿、教会(ルター派にとってはキリスト教徒)は花嫁にたとえられている。

教会カンタータ索引

A

Ach Gott, vom Himmel sieh darein BWV2 10
 Ach Gott, wie manches Herzeleid I BWV 310 12
 Ach Gott, wie manches Herzeleid II BWV 58 117
 Ach Herr, mich armen Sünder BWV 135 273
 Ach! ich sehe, itzt, da ich zur Hochzeit gehe BWV 162 321
 Ach, lieben Christen, seid getrost BWV 114 231
 Ach wie flüchtig, ach wie nichtig BWV 26 55
 Allein zu dir, Herr Jesu Christ BWV 33 70
 Alles nur nach Gottes Willen BWV 72 146
 Also hat Gott die Welt geliebt BWV 68 136
 Am Abend aber desselbigen Sabbats BWV 42 89
 Ärgre dich, o Seele, nicht BWV 186 366
 Auf Christi Himmelfahrt allein BWV 128 260
 Aus der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir BWV 131 266
 Aus tiefer Not schrei ich zu dir BWV 38 81

B

Barmherziges Herze der ewigen Liebe BWV 185 364
 Bekennen will ich seinen Namen BWV 200 392
 Bereitet die Wege, bereitet die Bahn! BWV 132 267
 Bisher habt ihr nichts gebeten in meinem Namen BWV 87 177
 Bleib bei uns, denn es will Abend werden BWV 6 18
 Brich dem Hungrigen dein Brot BWV 39 83
 Bringet dem Herrn Ehre seines Namens BWV 148 295

C

Christ lag in Todesbanden BWV 4 14
 Christ unser Herr zum Jordan kam BWV 7 20
 Christen, ätzt diesen Tag BWV 63 126
 Christum wir sollen loben schon BWV 121 246
 Christus, der ist mein Leben BWV 95 195

D

Das neugeborne Kindelein BWV 122 248
 Dazu ist erschienen der Sohn Gottes BWV 40 85
 Dem Gerechten muß das Licht immer wieder aufgehen BWV 195 383
 Der Friede sei mit dir BWV 158 315
 Der Herr ist mein getreuer Hirt BWV 112 228
 Der Herr denket an uns BWV 196 385
 Der Himmel lacht! die Erde jubiliert BWV 31 66
 Die Elenden sollen essen BWV 75 152
 Die Himmel erzählen die Ehre Gottes BWV 76 155
 Du Friedefürst, Herr Jesu Christ BWV 116 235
 Du Hirte Israel, höre BWV 104 213

世俗カンタータ索引

Amore traditore BWV 203 416
 Angenehmes Wiederau, freue dich in deinen Auen! BWV 30a 394
 Auf, schmetternde Töne der muntern Trompeten BWV 207a 433

Die Freude reget sich BWV 36b 397
 Die Zeit, die Tag und Jahre macht BWV 134a 401
 Durchlauchtster Leopold BWV 173a 404

Entfliehet, verschwindet, entweicht, ihr Sorgen BWV 249a 466

Geschwinde, ihr wirbelnden Winde BWV 201 409

Ich bin in mir vergnügt BWV 204 417

Laß, Fürstin, lass noch einen Strahl BWV 198 406
 Laßt uns sorgen, lasst uns wachen BWV 213 453

Mer hahn en neue Oberkeet BWV 212 449
 Non sa che sia dolore BWV 209 440

O angenehme Melodei! BWV 210a 444
 O holder Tag, erwünschte Zeit BWV 210 441

Preise dein Glücke, gesegnetes Sachsen BWV 215 460

Schleicht, spielende Wellen, und murmelt gelinde! BWV 206 425
 Schweigt stille, plaudert nicht BWV 211 446
 Schwingt freudig euch empor BWV 36c 399

Tönet, ihr Pauken! Erschallet, Trompeten! BWV 214 457

Vereinigte Zwietracht der wechselnden Saiten BWV 207 429
 Vergnügte Pleißenstadt BWV 216 463

Was mir behagt, ist nur die muntre Jagd! BWV 208 437
 Weichet nur, betrübte Schatten BWV 202 414

Zerreiße, zersprenge, zertrümmert die Gruft BWV 205 420